

活動報告（2018.1～2018.12）

（1）所員会議

第1回 2018年5月10日（木）

議題

1. 所長の改選について
2. 2017年度事業報告および決算報告について
3. 2018年度事業計画および予算について
4. 総合郷土研究所構成員の加入・継続申請について
5. 総合郷土研究所所員以外の構成員の任命および再任手続き要領の一部改正について
6. 愛知大学総合郷土研究所「紀要」投稿要項および執筆要領の一部改正について

（2）運営委員会

第9回 2018年1月25日（木）

議題

1. 非常勤所員の新規加入申請手続きについて
2. 図書除籍について

第10回 2018年3月8日（木）

議題

1. 総合郷土研究所所員以外の構成員の任命および再任手続き要領の一部改正について
2. 愛知大学総合郷土研究所「紀要」投稿要項および執筆要領の一部改正について
3. 選挙の当選辞退について

第1回 2018年4月26日（木）

議題

1. 2017年度事業報告および決算報告について
2. 2018年度事業計画および予算について
3. 総合郷土研究所構成員の加入・継続申請について

4. 研究費申請について

5. 図書等購入申請について

6. 運営委員の役割分担について

7. 地域見学会開催について

第2回 2018年5月31日（木）

議題

1. 研究費執行について
2. 図書等購入について
3. 2019年度ブックレット執筆希望者の募集について

第3回 2018年6月28日（木）

議題

1. 2018年度紀要第64輯の発行について
2. 2018年度科学研究費間接経費使用計画書について
3. 2017年度目的別事業評価シートについて

第4回 2018年7月26日（木）

議題

1. 2018年度紀要第64輯執筆者について
2. 2019年度ブックレット執筆者について
3. 総合郷土研究所図書室利用内規の制定について

追加議題

1. 2019年度新規事業予算申請について

第5回 2018年9月20日（木）

議題

1. 図書等購入申請について
2. 2018年度紀要第64輯執筆者について
＜追加＞
3. 2018年度補正予算について
4. 2019年度新規予算申請について
5. 総合郷土研究所ホームページについて
6. 総合郷土研究所利用内規の制定について

第6回 2018年10月18日(木)

議題

1. 図書等購入について
2. 2019年度新規予算申請について
3. 総合郷土研究所利用内規の制定について
追加議題

1. 今橋歴史塾からの後援依頼について

第7回 2018年11月22日(木)

議題

1. 2019年度予算申請について
2. 研究員の新規加入について

(3) 公開講演会

日時：2018年3月10日(土)

13時30分～15時30分

場所：愛知大学豊橋校舎 6号館 610教室

演題：町場を行き交う人々―戦国期尾張・三河を中心とした交通と流通―

講師：山下智也(総合郷土研究所研究員)

日時：2018年7月14日(土)

13時30分～15時

場所：愛知大学豊橋校舎 6号館 610教室

演題：「歴史の中の東海地震・リアル」をめぐって

講師：藤田佳久(総合郷土研究所非常勤所員、愛知大学名誉教授)

日時：2018年11月17日(土)

13時～15時

場所：愛知大学豊橋校舎 本館第3・4会議室

演題：私たちの考えるワーク・ライフバランス―地域と繋がるライフ・ワーク―

講師：高橋豊彦(東三河ヤクルト販売株式会社代表取締役社長)

(4) 刊行物

愛知大学総合郷土研究所紀要 第63輯

歴史の中の東海地震・リアル(ブックレット

27)

(5) 地域見学会

日時：2018年6月24日(日)

テーマ：川と空と城と～犬山・各務原・木曾川扇状地～

見学地：愛知県犬山市・岐阜県各務原市

(図1参照)

参加者：25名(学生16名)

■企画概要

昨年の総合郷土研究所の地域見学会は担当運営委員の都合(2017年度前期学外研修のため)により2017年12月の開催となったが、本年度は例年通り6月の開催(6月24日)で実施した。前年度の見学会から半年のスパンでの実施となったが、通例に戻した形のため、やむを得ない処置である。

本年度は、近年の地域見学会が、2017年度が静岡県焼津市と浜松市、2016年度が愛知県豊田市、2015年度が愛知県刈谷市周辺、2014年度が愛知県新城市と、愛知県と静岡県での実施となっていることを鑑み、岐阜県もしくは三重県を組み込む形で計画を立てることになった。適地を検討した結果、今回は木曾川を挟んで向かい合う愛知県犬山市と岐阜県各務原市を対象として、木曾川扇状地ならびに河岸段丘面上に双子のように立地しつつ、別々の歴史を歩んできた二つの地域を対比する形で廻り、その立地環境と歴史を体感する趣での地域見学会を企画することになった。

今年度の地域見学会は、前回開催との間隔が短かったこともあり参加者は必ずしも多くなかった(前年度よりは増加した)。しかし、参加者に対して実施したアンケートでの評価は概して高く、企画の目的自体は達成できたものと考えている。

■当日のタイムスケジュール・見学地

当日のタイムスケジュールと行程を表1、図1に示す。以下、簡単に当日の行程と内容を説明する。

梅雨の時期の開催になったが、幸い天候は晴れになった。9時に愛知大学豊橋キャンパスに集合し、大型バスに乗車、出発する。

車中では、まずスタッフの挨拶ののち、沿道的車窓景観の解説を適宜加えつつ、パンフレット（A4版で8ページ）をもとに当日のスケジュール等について説明を行った。資料等の説明は主に近藤が行ったが、歴史に関する部分は山田邦明所長の解説を仰いだ。今回の行程は豊橋市から東名高速道路豊川ICを経て、小牧ICで下車、犬山城下から各務原に至るという、三河・尾張・美濃にまたがる長駆のものである。しかし、それはその分沿道の諸々を実地で学ぶことができる機会でもあり、地理学と日本史学を専門とする両者の解説によって参加者には当該地域の歴史と地理について基礎的な理解を得ることができたであろう。

途中、東名高速道路の東郷パーキングエリアで休憩を取ったが、ここは2011年度まで存在した愛知大学旧名古屋キャンパスの跡地に近く、東名高速道路の車中からもキャンパス跡地を眺めることができる。教職員はともかく、現在の学部生は旧名古屋キャンパスの存在自体も知識にないものも少なくなく、車中ならびにパーキングエリアでの説明を、驚きをもって聞いていた。

途中の小牧IC付近では小牧山城跡を遠望できる。最初の訪問地犬山城も小牧山城と同様に織田信長と縁の深い城で、小牧・長久手の合戦（1584年）においては両軍が本陣を置いて向かい合った（羽柴秀吉が犬山城、徳川家康が小牧山を本陣とした）地でもある。今回、バスは家康本陣から秀吉本陣まで、小牧・長久手の合戦の舞台を進む形になる。

ほぼ予定通りに、犬山城第1駐車場に到着

した。ここから犬山城の門前までは徒歩で3分程度である。犬山城が位置する犬山市は、木曽川が濃尾平野に流れ出る地点、いわゆる扇状地の扇頂に位置する。犬山城自体は扇状地ではなく河岸段丘面上と山地に立地しているが、犬山の地を押さえるということは、濃尾平野全体ににらみを利かせられるということである。実際に地形分類図（第1図）をみても、犬山が木曽川扇状地の「扇の要」というべき位置にあることがわかるだろう。尾張を治め、また木曽川上流の山林を管理した尾張徳川家が、一国一城令の例外として犬山の地のみに出城を残し、筆頭家老（成瀬氏）を置いたことも、当地の重要性からして当然であった。今日でも、名古屋市に向かう上水道は犬山城付近の木曽川から取水されており、名古屋の喉元として機能し続けている。

一行はまず全員で犬山城を見学した。犬山城は、2018年現在現存する国宝5天守のひとつであり、かつては個人（成瀬氏）所有であったことでも著名である。築城は15世紀後半といわれているが、現在の位置に城郭が整備されたのは、1537年ごろ、織田信長の叔父にあたる織田信康が城主の時代である。江戸時代には尾張徳川家の筆頭家老成瀬氏の居城となり、以降戦災にあうこともなく現在に至っている。三層四階の天守は決して高層のものではないが、地形を利用して木曽川左岸の崖上に建てられているため、ここから木曽川を見下ろすと相当な高低差を感じる。河川に面した崖の上に屹立する天守の威容を形容して、中国の名城に因み「白帝城」の異名をもつ。一行は天守閣に登って木曽川を直接見下ろすことで、その異名の由来を実感したことだろう（午後は対岸の岐阜県側から犬山城を展望し、今一度この城が地形をうまく利用して建てられていることを実感することになった）。

昼食は犬山城下で各自が取る形で実施した。支城とはいえ、城主の成瀬氏は3万5千

石の太身であり、城下には独立した城下町が形成された。城下町は木曽川の河岸段丘面上に広がり、戦災を受けることもなかったため、往時の町並みを現在でもしのぶことができる。城下町の町衆が中心となって行われる「犬山祭」が全国的に著名で、城とともに犬山の大きな観光資源になっている。最近では、城下町の町並み整備と観光振興が盛んで、飲食店も多く進出してきている。参加者は自由に城下を散策するなかで、城下町の構造と町並み、観光地化の実際を見学することになった。

昼食を食べた一行は、再びバスに乗り、木曽川の対岸（右岸・岐阜県側）に移動した。木曽川右岸には犬山城下町と対応する地形面として、各務原台地が広がっている。各務原台地は、犬山城下と同じく、現在こそ河岸段丘面に位置しているが、元来は木曽川の扇状地面として形成された土地である。このため、東側（木曽川上流側）に向かって緩やかに標高が上がっていく地形をなす。難読地名として有名な各務原（かかみがはら）は、この台地を「かがみ（鏡）野」と呼称したこと由来するという説もある（語源については諸説あり）。台地の表層部は主に御岳山に由来する火山灰性の土壌で覆われ、台地上で水の便も悪かったことから、江戸時代までは荒地（草原）が広がっていた。木曽谷を抜けた旧中山道は、岐阜（加納）に向けて洪水のない台地上を通ったが、人家もまばらな各務原台地では、よく追剥が出没したという。台地の東端、丁度犬山城と木曽川を挟んで向かい合う位置には中山道鶏沼宿こそ立地したが、台地全体としては寂しい土地であった。

平坦で広大な土地に目をつけ、1879年には日本陸軍の演習場、1917年には陸軍各務原飛行場が開設される。これにより、各務原の性格は大きく転換した。各務原飛行場は現在、航空自衛隊岐阜基地に受け継がれ、現存日本最古の飛行場となっている。木曽川を挟んで、現存最古の天守閣と飛行場が立地して

いることになる。基地の周辺には、航空関係の工場など関連施設が発達し、各務原市は当基地を中心に「航空のまち」としての性質を強くもつことになった。零戦試作機や飛燕が初飛行するなど、旧日本軍の航空機の歴史を彩った飛行場は世界的な知名度もあり、秋の航空祭には多くの観光客が集まってくる。1996年には、岐阜基地に隣接した段丘下（木曽川扇状地面・氾濫原）に県立の「岐阜かかみがはら航空宇宙博物館」が開設された。館の特徴は広大な展示スペースを利用した実物展示であり、特に土日は家族連れでにぎわっている（公共交通機関でのアクセスが悪いのが難点）。見学会の後半は、当博物館の見学に割り当てられた。幸いにして梅雨にもかかわらず天候は安定し、見どころのひとつである屋外に展示された航空機の見学も可能で、参加者は興味深く見入っていた。

木曽川扇状地の扇頂にして濃尾平野と中部山岳の境界という類似した条件にあった二つの土地であったが、犬山は尾張藩の最重要拠点として南方の名古屋との結びつきを強めたのに対し、各務原は東西に延びる中山道を通して岐阜と結びつき、さらには航空のまちに発展していくことで、互いに対照的な歴史をたどることになった。今回、バスで両者を一体的に回することで、木曽川扇状地の地形と、その上に展開された人々の営みの歴史を、互いに対比させつつ、かつ総体的に学ぶことができたのではないかと自賛している。

ほぼ予定通りに航空宇宙博物館を出立し、イオンモール各務原を眺めながら東海北陸自動車道各務原ICから高速に乗り、豊橋を目指した。途中、名神高速道路で発生した事故の影響により名神高速道路一宮JC付近で渋滞に巻き込まれたが、行程上の問題はほぼなく、豊橋駅で一旦希望者を降ろした後、全行程を終えて愛知大学豊橋キャンパスにて解散した。ただし、解散時刻は途中の渋滞の影響で当初予定よりも約50分遅くなった。

■参加者のアンケートから

参加者（スタッフを除く）に配布したアンケートから、感想を簡単に紹介したい。

表2にあるように、参加者からの評価は高かった。また、来年度の参加にも前向きな回答が多かった。これは例年通りの傾向であるが、アンケート回答者の大多数が学部生であることを加味すると、このような好意的な評価や参加への積極的姿勢は、総合郷土研究所の地域見学会が、学生の自発的な学びを促すという教育面においても一定の成果を上げているものと判断でき、研究の枠を超えた意義を持っていることを再認識できる。ただし、学生参加者の絶対数という点では、豊橋キャンパスに通っている学生全体の1～2%の参加率というのはやはり少なすぎる。主催者側からの、地域見学会の意義と学生も参加できるという情報をどのように円滑に周知させ、参加を促すかが課題である。

今回の参加者には、「チラシ・掲示をみて」参加を決意したとの回答者の比率が高く、自発的な参加が多いのは喜ばしい。その反面、口コミ等の参加の広がりには欠け、これが全体の参加者数が劇的に増加しない一因だろう。企画の質については概ね評価が得られているので、それを十分に伝えて口コミにつなげ、参加を促す広報体制の構築や、リピーターの確保が今後とも重要だと考えられる。

個別の感想では、例年同様に、「500円で行くには「大丈夫か?」と思うぐらいお得で良かった」など、企画のお得さ（実際に、岐阜かかみがはら航空宇宙博物館の入館料だけでも正価だと800円）への高い評価が得られた。もちろん、企画内容についても「犬山城も空自の博物館も充実していて良かった」「濃尾平野や豊橋周辺の歴史的地理的解説が大変わかりやすく参考になった」など、概ね好意的な評価が得られており、企画としては意図を相当程度達成したものと考えている。また、「教授たちの話をじっくり聞くことができ、

犬山ないし愛知県の理解を深めることができた」「近藤先生や山田先生のバスガイドも非常に面白く、天気も晴れて最高」などの感想もあり、専門的な解説を直接現地で得られるという本企画の特長は十分に示せたと考えている。

企画への不満や要望としては、昨年度のような「トイレ休憩が少ない」との不満は出ず、これは改善の結果だと評価できるが、「見学時間が短い」というタイムスケジュール面での意見は変わらずみられた。どうしても遠方へのバスツアーになると見学に割ける時間が限られ、その分駆け足型の内容になるのは避けられないが、物見遊山的ツアーにせず参加者個々人が地域に自分の目と足と頭でとことん向き合うというのも地域見学会のひとつの趣旨であろうことから、時間配分についても今後の反省材料といえる。ただ、バスツアーという性質上、あまりひとところにとどまり続けるのはやはり合理性を欠く。バランス配分の余地は当然あるが、地域見学会はあくまで「見学」であり、更なる探求の呼び水として、「次はじっくり見てやろう」「次は地域の方々とゆっくり話をしたい」などという次につながる契機になれば、まずは喜ぶべきだろう。

また、「歴史的な犬山と現代の科学技術中心の航空宇宙博物館の対比」というカップリングは、例えば歴史に興味があるが航空分野にはそれほどでもないという参加者にとっては物足りなさが残るものではあったかもしれない。「あまり興味をもっていなかった飛行機に興味をもつことができた」「“地理×日本史”が存分に生かされた内容」など、企画の狙いに合致した感想も多く寄せられたが、安易なカップリングは見学会全体のまとまりを毀損する恐れがあることへの戒めとして記しておきたい。

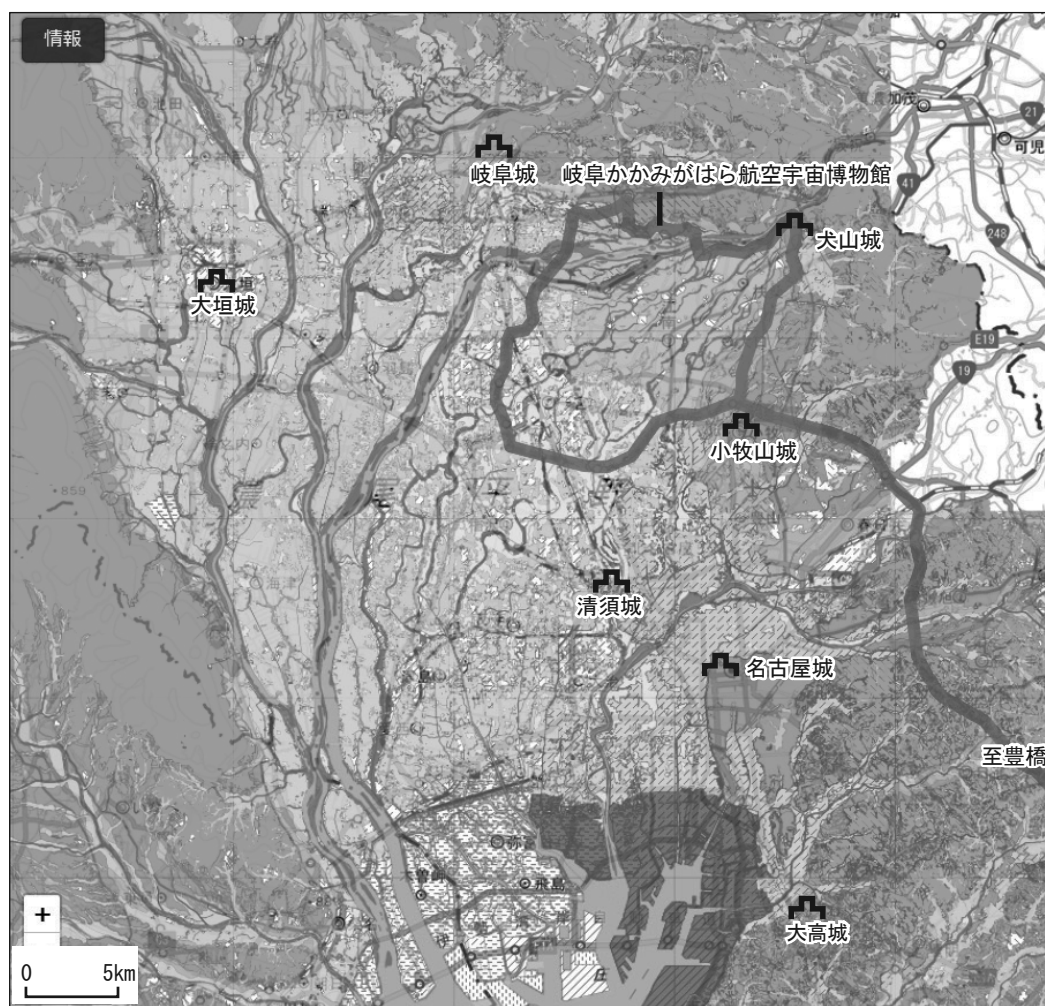


図1 地域見学会の行程（濃尾平野付近のみ）
（『地理院地図』地形分類図に加筆）

活 動 報 告

表 1 総合郷土研究所地域見学会（2018 年 6 月 24 日）タイムスケジュール

9 : 00	愛知大学豊橋キャンパス集合・出発 →東名高速道路豊川 IC→小牧 IC→犬山城
11 : 00	犬山城見学後犬山城下を散策・各自昼食
13 : 00	バス集合、木曽川渡河
14 : 00	岐阜かかみがはら航空宇宙博物館
16 : 00	出立→東海北陸道岐阜各務原 IC→東名高速道路豊川 IC
18 : 40	豊橋駅前
18 : 50	愛知大学豊橋キャンパス・解散

表 2 地域見学会参加者アンケート回答結果の集計（回収 22 件）

問：企画への満足度		問：参加のきっかけ（複数回答）	問：来年も参加したいか	
大満足	9 (10)	チラシ・掲示をみて	13	(8)
まあ満足	12 (9)	先生や同僚に誘われて	6	(7)
普通	1 (0)	友達に誘われて	4	(3)
やや不満	0 (0)	その他	2	(1)
不満	0 (0)	無回答	0	(0)
			ぜひ参加したい	6 (8)
			企画次第では参加したい	15 (9)
			参加する気はない	0 (0)
			わからない	1 (2)
			無回答	0 (0)

※ カッコ内は昨年度の参加者アンケートの結果（回収 19 件）

(6) 資料整理作業報告

2018年1月から12月までにおこなった収蔵資料の整理について簡単に紹介する。

1. 三河国八名郡牛川村松坂家文書の目録作成

(史料群No.10)

残り406点の文書の整理をし、松坂家文書は一通り全体の整理を一応は終えた。しかし、当該文書は長期に亘って多人数による整理作業を行っていたため、目録の体裁に統一性がとれていないなどの問題が多くあるので、再点検を行わなければならなくなった。また尾張藩士中山家文書(史料群No.178)や馬見塚村渡辺家文書と思われるものも混在しているので、これについても再検討する必要がでてきている。

今年度整理した史料には、端午・元服・婚礼の祝儀帳や香奠帳、過去帳など家に関するものがある。また安政の大獄や桜田門外の変等に関する風説文や江戸城内の絵図・大河内松平家の系譜の写しなどがあり、幕末期にさまざまな情報を集めていたことが窺われる。

2. 三河国幡豆郡田貫村石川平三郎家文書の目録作成

(史料群No.295)

2017年度に購入した新収蔵史料で、当初の見積もり点数230点のうち205点の整理を終えたが、結果枝番号を含めて、約3倍の609点となった。

近世期の文書としては、土地売買証文・質地証文・借金証文・奉公人請状・領収書類など家関係のものが多いが、とくに奉公人請状は女性奉公人のものが多く、女性史の視点からみても興味深いものである。一方、村人個人(おもに田貫村以外の村人で田貫村の土地を耕作に来ている入作人かと思われる)が田貫村に納めた年貢量がわかる年貢勘定書など、村方文書の基本的なものもあった。そのほか、蒲原新田関係や田貫村の神社関係の文書もあった。

近代期の文書も近世期と同じく、土地売買証文・土地譲渡証文・借金証文・領収書類など、やはり家関係のものが多かった。また、婚礼(祝儀)帳・香典帳・御見舞帳・奉加帳など冠婚葬祭の際の記帳類があり、そこに書かれた参加者の住所・屋号・氏名などから当該期の石川家の交際範囲や交際関係がわかる。また第11大区第3小区の中において、田貫村を含む戸長を石川家が務めていたので、諸願書・選挙関係をはじめ明治初期の地方行政文書も多くある。そのほか藻採組合・漁業組合・地図委員・頼母子講関係のものもあるが、なぜ石川家にこの関係の文書が残されていたか、理由は不明であり、今後の課題である。

(荒木亮子、滝井友子)

愛知大学総合郷土研究所「紀要」投稿要項

1. 著者の資格
 - (1) 所員
 - (2) 非常勤所員
 - (3) 研究員
 - (4) 補助研究員
 - (5) 総合郷土研究所運営委員会が認めた者
2. 対象とする空間領域
東海地方および隣接諸地域とする。
3. 原稿の種類
 - (1) 論説
 - (2) 研究ノート
 - (3) 資料（史料）紹介
 - (4) 講演及び討論記録
 - (5) 書評
 - (6) その他
4. 著作権
 - (1) すべての著作権は総合郷土研究所に属する。
 - (2) 執筆内容が第三者の著作権を侵害するなどの指摘がなされ、第三者に損害を与えた場合は、著者がその責を負う。
 - (3) 「紀要」に発表した論文を著書などに転載するときは、所長の許可を得る。
5. 愛知大学リポジトリへの掲載
 - (1) 原則として、「紀要」は全文を愛知大学リポジトリに掲載する。
 - (2) 愛知大学リポジトリへの掲載を希望しない著者は、原稿提出時に掲載しない旨を原稿添付表紙に記入し、提出する。
6. 編集担当委員の権限
 - (1) 紀要の編集は、総合郷土研究所運営委員会構成員の中から選出された編集担当委員が行う。
 - (2) 編集担当委員は、原稿の対象とする空間領域が2に適合しているかを判断する権限を持つ。
 - (3) 編集担当委員は、原稿の内容に関わらない紀要全体を通しての体裁及び形式についての権限を持つ。
 - (4) 編集担当委員は、著者が提出した英文タイトル及び氏名を、適切な手順を経て修正する権限を持つ。

愛知大学総合郷土研究所「紀要」執筆要領

1. 執筆言語は和文とする。
2. 原稿は原則として電子媒体で作成し、図表も含めて完全原稿とする。
3. 原稿は横書きで作成し、A4判で1ページ40字×40行で15枚以内とする。
4. 数字は算用数字を使用する。暦年は専門分野の習慣による。
5. 図表にはそれぞれ通し番号を付け、図の表題は図の下に、表の表題は表の上に記載する。
6. 注記は本文の該当箇所の右肩に注記番号を付け、原稿の末尾にまとめて記載する。
7. 引用・参考文献の表記法は専門分野の習慣に従えばよいが、著者名、書名または論文名、雑誌名（号数）または発行所（者）名、刊行年、該当ページまたは総ページ数を記載する。欧文文献の雑誌及び書名は、イタリック体（または該当箇所をアンダーライン）で表記する。
8. 原稿提出時には、英文のタイトル及び氏名等を記載した原稿添付表紙を提出する。
9. 電子媒体で作成した原稿は、電子記憶媒体と印字紙を提出する。
10. 校正は2回以内とする。校正は原則として誤字脱字のみとし、大幅な変更は認めない。
11. 補助研究員は所員の指導と校閲を経て原稿を提出する。

2018 年度研究組織〔所 長〕山田 邦明

〔所 員〕	阿部 聖	有蘭正一郎	飯塚 隆藤	伊東 利勝
	岩崎 正弥	印南 敏秀	宇佐美一博	檜村 愛子
	加納 寛	神谷 智	木島 史雄	近藤 暁夫
	迫田 耕作	須川 妙子	鈴木 誠	高原 隆
	武田 圭太	早川 大介	樋口 義治	樋野 芳雄
	廣瀬 憲雄	安 智史	安福恵美子	山田 邦明
	和田 明美			

〔非常勤所員〕	安藤 勇	市野 和夫	井口 喜晴	伊村 吉秀
	交野 正芳	加納 俊介	佐野 賢治	沢井 耐三
	杉本 一郎	高橋 貴	田崎 哲郎	玉井 力
	西尾林太郎	西堀喜久夫	藤田 佳久	別所 興一
	堀江登志実	宮入 興一	渡辺 和敏	

〔研 究 員〕	天野 景太	荒木 亮子	岩原 剛	内浦 有美
	大久保あかね	大崎 洋	栞原 将人	権田 浩美
	佐藤 泰子	高木 秀和	高橋 賢	橘 敏夫
	塚本弥寿人	佃 隆一郎	内藤 聡子	内藤 路子
	長屋 隆幸	西尾 美德	菱川 晶子	日比野浩信
	平川 雄一	藤喜 一樹	古田 功治	保住 敏彦
	松岡 敬二	松田香代子	松村 美奈	三世 善徳
	村瀬 典章	森田 実	山下 智也	和田 実

〔補助研究員〕野田 賢司

〔運 営 委 員〕	(庶 務)	近藤 暁夫
	(資料収集)	廣瀬 憲雄
	(企 画)	武田 圭太
	(紀要編集)	飯塚 隆藤

〔事 務 局〕小林 倫幸